ふるさと応援団員からの便り

地震の怖さ

岡村　勲
東京都在住
宿毛市橋上町出身
昭和4年生まれ

終戦の翌年の暮れ、中村中学校（旧制）4年生の私は、中村警察署の直ぐ傍の家2階に下宿していた。

山際にあった幡多病院から退院した疲れから、ぐっすり寝込んでいたのだが、激しい揺れで目が覚めた。一瞬台風かと思ったが、12月に台風が来るはずはない。これは大地震だと思って起きろうとするが、体が転がって立ち上がれない。本箱や障子が次々倒れてくる。辛うじて机の下に頭だけは突っ込んだ。揺れがおさまると、階段を転がるようにして外に出た。

猛烈な揺り戻しがきた。幸い山の麓にあった下宿は無事だったが、隣から続く家はすべて1階が潰れて2階が道路にせり出していた。

救出活動が始まった。隣家の屋根を剥がし、天井に小さな穴を空けて女学生を一人一人ずつ引き出したが、下着が穴にひっかかって脱けたと言って泣き出す女学生もいた。

夜が白み始めると幡多病院が気になり、天神橋を歩いて行った。両側の家は倒壊し、道路は裂かれ陥没している。やっとの思いで辿り着くと幸い病院は倒れてはいなかったが、知り合いの入院患者は毛布を被って路上で震えている。

病院と隣家の前にあった頑丈なコンクリートの塀が倒れていた。つるはしで壊した塀の下から、秀才の誉れの高かった岸本清君とお母さんの遺体が出てきた。泣きながら飛びつこうとする妹の績さんの姿が今も目に焼きついている。

昭和21年南海地震（市立図書館提供）

鉄橋も落ちた。火事も起こった。倒れた柱に足を挟まれた人が、「足を切ってくれ」と叫びながら焼死したという話も聞いた。将に生き地獄だ。

南海地震では県下で死傷者が最も多かったのは中村だと聞く。

東日本大震災のあと、石巻を始め被災地を廻った。宮城県の中浜小学校は、津波が校舎の間を走り抜けるように設計されていたために、この学校だけが残った。生徒や父兄はこの学校の3階建ての屋上の倉庫で膝まで海水に浸かりながら助かったという。女川町では海抜16メートルの高台に建てられた町立病院だけが残り、救援の中心になった。12メートルで充分とする多数意見に対して14・8メートルの防波堤を強く主張した東電元副社長がこの町を原発被害から防いだ。南三陸町では地上12メートルの防災センターの鉄骨だけが残っていた。

すべてを失い体育館で毛布1枚で生活している人達、3日間も水を飲も飲めないで生活した被災者。すべて一瞬の地球の動きから生まれた。

南海大地震の何倍も大地震が起こり、高知県には30メートルを越す大津波が襲うとの試算もあるようだ。

日本列島という地震の巣の上に住んだのが運の尽きと言えばその通りだが、できるだけ知恵を出し合い、できる限りの対策は、早めに考えて置かねばなるまい。

（弁護士
全国犯罪被害者の会　元代表
日本弁護士連合会　元副会長）